

Mikhail Belov

ミハイル・ペロフ

4 Projects in Moscow 1991-1992:
White Hall
Red Columns Office
Secret Club
Bridge through the Ring
Interview: Klein

モスクワのインテリア 4題

ホワイト・ホール

赤い円柱のある事務所

シークレット・クラブ

貫通するブリッジ

文・写真：山崎揚史

インタビュー：クライン

左ききのガンマン、ミハイル・ペロフ

1917年 ユートピアという楽園にいたる戯曲の幕が開いた。この戯曲は、人工的につくられたシステムによって楽園を建設することを目指す「社会主義」という理念と人間という超自然的なものとの対話によって74年間進行していった。その舞台は、ロシアという大地の上で展開した。そして、最終の幕において人間のもつ潜在的な本能が露呈して幕は閉じたのであった。これは大きな歴史の流れの中での、社会主義国家ソ連邦の崩壊である。しかし、残念なことには幕が降りた今日、いまだにこの舞台から人々は目を醒ますことができないでいる状況である。人々は、麻薬中毒患者のようなまなざしで天を仰いでいるように見える。彼らはイデオロギーの中毒患者なのである。共産主義社会にたいし、絶対的な信頼を強制され、それが根本的な常識となってしまった人々の中から、共産主義社会という人々にとって重要な核が消滅してしまったのである。さて、このような社会主義国家という社会の中で、ソ連建築界は国家体制と大きな関係もちながら、幾たびかの変遷を繰り返し現在のソ連邦の破綻と同じ運命を辿ってきた。

1917年に、レーニンの指導下のもとに起きた大十月社会主義革命は、世界初の社会主義国家を築きあげた。この革命のロマンティックな風潮は、ロシア・アヴァンギャルドという新鮮な新芸術運動を生むこととなる。ソ連建築界にはいくつもの様々な新しい建築家グループが出現した。ギンスブルク、ヴェスニン兄弟を中心とする、OSA(現代建築家同盟)、ラドフスキー、クリンスキー、バルヒン、リシツキーによるASNOVA(新建築家連合)、そしてその後、ラドフスキーが分離して結成した、ARU(建築家・都市計画家集団)、VOPRA(全ロシア・プロレタリア建築家同盟)等々である。しかし、これらのグループは1930年始めの大国家事業の一環としてソヴィエト宮殿計画、重工業省計画の二つのコンペを契機に勢いを失い、多くのアヴァンギャルディストたちは革命以前の大アカデミスト建築家、ジョルトフスキーのもとに再び帰属していくことになった。1932年にこれらの建築家グループは、共産党のもとに統制され、「ソ連建築家連盟」を確立することになった。この建築家同盟は、ソ連国家にあわせて中央集権的な建築機構をつくり上げ、やがてソ連建築界の最高峰に位置する機構となったのである。それは、ソ連共産党の一機関となり、共産党の上部官僚、人民代議員などがこの機構の上層部を占め、ソヴィエトの官僚主義体制の中に埋もれていくことになるのである。やがてこの流れは、フルシチョフ、ブレジネフという時代の中で停滞し淀んでいくのであった。このような状態は、長くは続かなかった。1985年、ゴルバチョフ政権下において、ペレストロイカ、世直し政策がしかれ、約70年間積み重ねてきたツケにより、その流れはさらに深く淀んでいった。すべての生産力は低下し、建築生産はほとんどストップしてしまった。ソ連の国家機構のひとつであるソ連建築界はソ連国家と同じように、その建築活動の本質的意味を失っていくことになったのである。ゴルバチョフ政権はペレストロイカとあわせてグラスノスチ政策をとった。この政策は、ソ連建築業界に新風を巻き起す結果となった。それは、海外の国際建築コンペへの応募が可能になったことであり、また協同組合という国家組織の枠の外で合法的に建築事務所を設立することができるようになった。この二つの大きな変革がソ連建築界に新たな建築家を出現させることになるのである。ソ連の若手の建築家が続々と国際コンペに出品しその作品は各コンペにおいて高い評価を受けていったのである。彼らは、ソ連の社会主義建築界にたいして反発を続けていた人々である。彼らは、ソ連の建築界においてはごく少数派に属し、建築界の大勢からは、建築家として認められてはいなかった人々であった。彼らは、ブマージヌウィ・アルヒテクトル(ペーパー・アーキテクト)と呼ばれていた。ソ連国家が衰退して国家機関の建設局は財政難により、その建設活動をほとんど停止した。以前のような運営が不可能となり、その波は、若手建築家(ペーパー・アーキテクト)にもおよんだ。ソ連の体制下では国家機関の建設局が設計施行を一括して行なうため、建築家はただ単に設計書類を作製する労働者と

Mikhail Belov: Born in Kaliningrad, U.S.S.R., 1956. Entered the School of Architecture in Moscow, 1974. Awarded honorable mention in the Nara City Hall International Design Competition, 1992.

してとらえられてきたのであった。そのため、ソ連邦が崩壊した今日、建築家は、設計書類を建設局に売り、建設局が施工を組織するというものになっているのである。設計監理というものが存在しないといえよう。そのために、中央集権的な建築機構を現在の建築界から、抜き取ることができないのである。1988年ドイツ建築博物館で、初の「ペーパー・アーキテクト」展という展覧会が開かれた。そのとき名を連ねたソ連の若手作家はおよそ20人を越えた。しかし、今日建築家として活動している作家はその半分にも達しない。その建築家たちは、ソ連社会の中で秘密結社のごとく、目立たぬように制作しているのである。さて、その制作活動を続けている建築家のひとりに、ミハイル・ペロフという作家がいる。彼は、自分の空間表現を現実化する方向により前向きである。そのため、彼ほど近年、実作を残せた建築家は、モスクワには存在しない。

彼は、1956年ロシア共和国西部のケネスベルグ（カリーニングラード）に生まれる。彼の父は士官であったため、ソビエト国内を転々と移り住むことになる。バルト三国、グルジア、ウクライナと一都市に定住することのない少年期を送った。これは、彼にグローバルな行動力をつけることに一役買ったともいえるであろう。その後、1974年モスクワ建築大学に入学する。彼は在学中、コンセプトualで、物語性を強調した建築ドローイングを描き始める。大学での彼の師は、ロシア・アヴァンギャルディスト・G.バルヒンの末裔であるB.バルヒン教授であった。B.バルヒンは、国家の建築機関の中に浸かることを避け、できるかぎり独立した状態であることを求めた、数少ない人物である。

70年代後半モスクワ建築大学には、才能のある学生たちが存学していた。彼らは互いに切磋琢磨し合い、同時に日本のアイディア・コンペに競って応募した。その作品は審査員に強い印象を与えた。彼ら一人一人をみると、彼らはあくまで個人での活動を基本とし、集団をつくることを否定している。

ペロフは、自分の作品は建築のジャンルを越えた演劇、文学、映画というものから強く影響を受けていて、大学からの影響がないことを強調している。彼は、作品を直感的に、かつ楽観的につくっていく。すなわち、自分から湧き出たものが最高の決め手となって物語・デザインを決定していく。彼の建築をつくっていく作業は、映画のシナリオを書き、カメラを回していく映画監督のようでもある。しかし、彼の建築に力を与えてくれるのは、モスクワという特殊な社会状況である。現在の生産力の無さにより生ずる、材料の不足、職人の不足、建設技術の稚拙さという、ある種のミニマリズムの中での作業が、彼の活動を純粋なものに近づけているように見える。

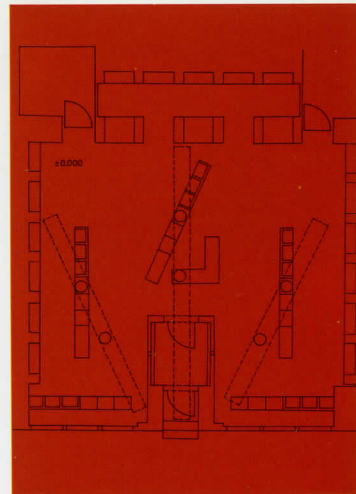
1990年になると彼の作品が実現されてくる。それは、以前存在しなかった個人資産が認められ、それを運用しようとするソ連版ニュー・リッチがクライアントとして建築を発注するような、新しい社会状況が生まれてきたことによる。1992年までの2年間で四つの作品を実現することができた。その作品のすべては、19世紀以降につくられたモスクワの典型的建築の一部分のインテリアの改修工事である。

ディテールをできる限り消し、ほとんどが廃材の合板もしくは石膏ボードの上からペンキを塗った仕上げとなっている。そして、外部からは内部を察することが、まったく不可能なまでに無口でいることに徹底している。すなわち、それらはミクロ的空間が暴力的なモスクワの街のなかに潜むことを意識しているのである。

彼はモスクワでこのミクロ的な仕事をするかわら、海外の国際実施コンペにも並行して応募をしている。そのコンペはすべて大規模な、マクロ的規模のものである。ウィーン万博、奈良市民ホール（特別賞）、横浜アーバン・フォーラム等である。ソ連は崩壊した。しかし、その骨格は未だに変わろうとしない。暴力的な旧ソヴィエト体制にたいするモスクワでのミクロ的戦闘は今まだつづけられている。彼の興味は、このミクロ的活動と西側でのマクロ的活動をいつも対峙させ建築をつくっていくことにある。彼のいくつかのミクロ的分子が、将来その相互の分子間力により、ロシア建築に光をもたらすことを願っている。ペロフの左手は、休むことを知らない。

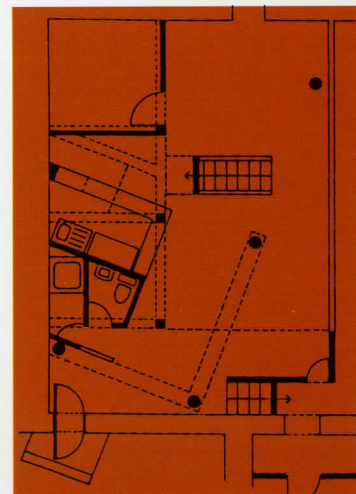
1. White Hall Stoleschnikov Pereulok

1. ホワイト・ホール
ストレジニコフ・ペレウロック



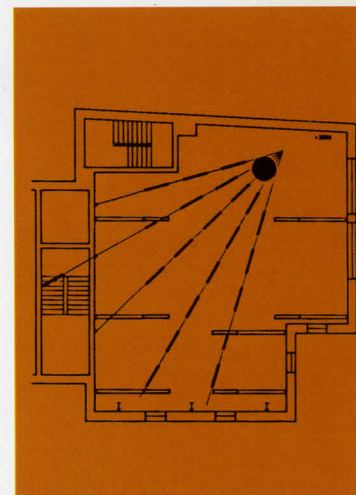
2. Red Columns Office Eresenjawskoja Nabereschna

2. 赤い円柱のある事務所
ベレセンヤフスコヤ・ナベレスナ



3. Secret Club New Arbat

3. シークレット・クラブ
ネウ・アルバト



4. Bridge through the Ring Olsufizowskij Pereulok

4. 貫通するブリッジ
オルスフィゾフスキ・ペレウロック

